

「神のあわれみ」

マルコ 1:40-45

22.07.31 平吹光太

本日は、イエス様がツアラアトに冒された人との出来事のみことばから共に教えられていきたい。

I. ツアラアトに冒された人

「さて、ツアラアトに冒された人がイエスのもとに来て、ひざまずいて懇願した。『お心一つで、私をきよくすることがおできになります。』」（40節）

ツアラアトとは、新改訳聖書第二版までは「らい病」と訳されていたが、ツアラアトはらい病を意味していないことが分かり、第三版からはヘブル語のツアラアトと記されている。ツアラアトについて知ることで、それに冒された人がどれ程の悲惨さを味わっていたかを見ていきたい。ツアラアトはこの当時、伝染性の強い様々な種類の悪性皮膚病で、また、人間以外の服や壁にも出る（カビと考えられる）とされていました。この当時のユダヤ社会では、祭司はレビ記 13 と 14 章に記されている律法に従い、ツアラアトの診断をし、ツアラアトに冒された者を宗教的に汚れた者と宣言する担当であった。そして、ツアラアトに冒された者は町の外に隔離をされ家族とも離れて住まなければならない。町の外に追放されることは律法を犯したこととみなされ、神の祝福から絶たれることを意味した。そのため社会活動はもちろん教会活動、礼拝に参加することさえできない。また、汚れた者に触れた者は、その人も汚れると律法にあるため、安全な距離を保つためにツアラアトに冒された人に石を投げる者もいた。そしてツアラアトに冒された人は、他人が自分に触れないように、「汚れている、汚れている」と叫ばなければならない。ユダヤ教の指導者達はツアラアトに冒された人を生きたしかばねと見ており、ツアラアトが癒されるのは絶望的と考えていた。

このように、ツアラアトに冒された人は生きていても死んだ者のように扱われ、社会からも家族からもそして神からも見放された者達として差別されるような想像を絶する苦痛の中で生きなければならない。

私たちは友人や家族に見捨てられるようなことがあっても神だけは共におられると慰めを得られますが、ツアラアトに冒された人は、その望みもなく、どれ程の絶望感だったか計り知れません。

本日の箇所のツアラアトに冒された人は、まず、イエス様のもとで、ひざまずいて懇願した。彼のイエス様に対してのこの態度は、これまでの彼の味わった労苦の過酷さを物語っており、この状況から一刻も早く救い出してほしいという心からの願い。礼拝の姿勢であり、イエス様以外に頼るお方はいないという信仰の表れ。彼は宗教的に汚れた者と自覚していたため「癒すことができます」ではなく、「きよくすることができます」と言っている。人に近づくことはもちろん神に近づくことも相應しい者ではないと自覚していた。

「お心一つで」とは、新改訳 2017 の聖書の脚注に、別訳で「もしお望みくださるならば」と記されており、この訳の方が本来の原語の意味に近い。

つまり、「お心一つで」との告白は、「主よあなた様がきよめられるようにもしお望みくださるなら

ば」という御心、主の意思を問う意味であり、彼は主の意思によって全てが支配されていることを分かっていた。彼はツアラアトには冒されていたが、主の御前にへりくだりの信仰があった。私たちが試練にあう時、なぜ自分だけがこのような大変な苦しい目に遭わなければならないのかと神のせい、人のせいにするのではなく、ツアラアトに冒されていた彼のように、まず自分は神に近づくことさえできない者であることを認め、主の御前にひざまずき、悔い改めたい。そして全ては主の御心によって支配され、必ず益と変えてくださることを信じて委ねるというへりくだりの心が与えられるように祈りたい。

II. 主のあわれみときよめ

「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。すると、すぐにツアラアトが消えて、その人はきよくなった。(41-42 節)

当時の人たちはツアラアトに冒された人が近づいてくると、自分にうつされないように逃げました。しかし、イエス様は彼から逃げようとはせずに、むしろ「深くあわれみ、手を伸ばして彼にさわり、『わたしの心だ。きよくなれ』と言われた。すると、すぐにツアラアトが消えて、その人はきよくなった。」

ここで使われている「深くあわれみ」という言葉の原語は次のような意味があります。以前の訳では、「かわいそうに思われた」となっていた。この原語は強烈な心情の動きを表す言葉。これは内臓を意味する「スプランクナ」から出ている。ヘブル思想では内臓は人間の深い感情の宿る所と考えられていた。心底から激しく動かされて、積極的にあわれみの働きをせざるをえない心を示している言葉。この言葉をさらに具体的に言い換えるならば、「胸が張り裂ける思い、居ても立っても居られないような気持ち、はらわたがちぎれる程辛い」と言うことができる。

イエス様は、ツアラアトに冒された人が、その病に苦しめられ、社会から差別され、家族にも会えず、教会にも行けない孤独で屈辱で絶望の毎日を送ってきたことを思い、はらわたがちぎれる程の深いあわれみを彼に表された。

イエス様の言われた「わたしの心だ」の言葉も、先程のツアラアトに冒された人が述べた「お心一つで」と元は同じ言葉で、別訳で「わたしは望む」と新改訳 2017 の聖書の脚注に書かれている。こちら「わたしは望む」の訳の方が本来の原語の意味に近い。

つまりイエス様は、そのような彼に「わたしは望む」と言われ、手を伸ばして彼に触れられました。

「汚れるからさわってはいけない」と彼は言いかけたかもしれませんが。彼がどれ程の年月、ツアラアトに冒されていたのかは分かりませんが、家族の手にすら触れてもらうことは長い間なかったはず。そのような中で、人の手、それも主イエス様の手に体を触れられ、どれ程の慰め、愛のぬくもりを感じたことでしょう。そして、彼のツアラアトはイエス様によってきよめられました。

このイエス様の行為は長年の伝統と規則を破り、ユダヤ教指導者から攻撃されるリスク、そして何よりも病が移るリスクを伴っていましたが、暖かい愛をもって触れて下さいました。そのイエス様の行為の真意は、相手の痛みを自ら引き受け、同じ立場と一緒に居ることを意味していた。このイ

イエスの行為が意味する最終目的は、罪によって滅びに至る私たちをあわれみ、その全人類の罪を十字架上で全てその身に引き受けてくださるといふ出来事へと至る。なんとというあわれみ、なんとという慰めでしょう！

主は人が触れることを拒む、私たちの醜く汚れたところに愛の御手で触れ、清めてくださる。主は誰にも理解されない私たちの痛み苦しみを常に深くあわれんでくださっているお方。

あわれみとは、根本的には人間の救いに対する神の真実な愛を表している言葉。エレミヤは「神のあわれみ」をこのように述べています。「私はこれを心に思い返す。それゆえ、私は言う。「私は待ち望む。主の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。」(哀歌 3:21-22) パウロも「神のあわれみ」をこのように言っています。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」(エペソ 2:4-5) 私たちは、滅びて当然のことを神に対して行っていたにも関わらず、この罪深い私たちが救われたのはあわれみ豊かな神の恵みによる。

私たちは日々、主の御前にひざまずき、罪を悔い改め、主の十字架の御業は私のためです、清めてくださいと告白し清めて頂きましょう。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」(1ヨハネ 1:9) と約束されている。私たちは神のあわれみの故に滅びの裁きからまぬがれ、神の恵みによって豊かな人生と最も素晴らしい天国で永遠を過ごす祝福を与えられている。神のあわれみと恵みにいつも感謝し、心からの礼拝を主にお捧げして参りましょう。

III. 社会的回復と礼拝生活への回復

「イエスは彼を厳しく戒めて、すぐに立ち去らせた。そのとき彼にこう言われた。『だれにも何も話さないように気をつけなさい。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめのささげ物をしなさい。』ところが、彼は出て行ってふれ回り、この出来事を言い広め始めた。そのため、イエスはもはや表立って町に入ることができず、町の外の寂しいところにおられた。しかし、人々はいたるところからイエスのもとにやって来た。」(43-45 節)

ツアラアトからきよめられたかどうかの判断も祭司の仕事であった。そのため、イエス様は、「自分を祭司に見せなさい」と言われました。イエス様のツアラアトに冒されていた人への癒しは、体と心だけではなく、社会生活と礼拝生活への回復も与えられた。私たちの全ての面において祝福を与えてくださる神の大きなご配慮にいつも感謝する者でありたい。

また、イエス様は彼に「だれにも何も話さないように気をつけなさい。」と注意したのにも関わらず、彼は、自分に起きた出来事を言い広めました。普通に考えれば、奇跡を通して、イエス様がメシアであることを多くの人に知らせる絶好のチャンス。しかし、イエス様が言わないように注意されたのは、人々が奇跡や癒しのみ注目し、イエス様が地上の政治的な救世主とされて、大切な福

音（罪の赦しと永遠の命）を伝えることが阻止されないためであった。

私たちは良かれと思って事を行うことがあるが、必ずしもそれが正しいとは限らない。そのため、神のみことばにいつも目を留め、何が正しいのかを主からの知恵を頂いて判断していきましょう。

祈り：自分の罪故に滅んで当然の私たちへの主のあわれみと恵みを心より感謝致します。いつも主のあわれみと恵みに感謝して歩む者とさせてください。